仕置の徒（しおきのと）

すけなが

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仕置の徒（しおきのと）

【Ｎコード】

Ｎ４２０６Ｕ

【作者名】

すけなが

【あらすじ】

この世には厳然たる悪がある。時に人は、そんな悪から目を背けたがる。けれども〈彼ら〉は決して黙ってはいない。悪の心根を探り出し、法に変わって裁きを下す。それが〈彼ら〉のやり方だ。

登場人物紹介

〈主要登場人物紹介〉

海尾（うみお）わたる／男。３６歳。財団法人市民保護センター御用聞（ごようきき）課勤務。

望月（もちづき）　乙女（おとめ）／女。２８歳。財団法人市民保護センター御用聞課勤務。

服部（はっとり）　蔵人（くらんど）／男。６０歳。警視庁地域総務課勤務。

風間（かざま）　相太（そうた）／男。３０歳。自称ジャーナリスト。

根来（ねごろ）　紀久（のりひさ）／男。４８歳。下町にある旋盤工場社長。

伊達（だて）　黒輝（くろき）／男。３５歳。心理カウンセラー。

長島（ながしま）　伊勢（いせ）／女。２４歳。国立東部大学生物学部研究員。

望月（もちづき）八千代（やちよ）／女。６０歳。バー〈巫女（みこ）〉のママ。

権藤（ごんどう）　勇作（ゆうさく）／男。７０歳。里親団体〈雀（すずめ）の杜（もり）〉所長。

第1話・親にあらず・第1項（前書き）

世にはびこる悪に、まっとうな裁きを下す。
仕置の徒、登場。

第1話・親にあらず・第1項

この世には悪がある。
信じがたい悪がある。
どこかで誰かが泣いている。
助けてくれよと泣いている。
誰かが討たねば。
我らが討たねば。
流れた涙は報われない。

財団法人市民保護センター御用聞課（ごようききか）は、もう黄昏に包まれつつある。

「毎日ひとりで寂しいだろうけど、死んだって何もいいことはないよ」

海尾（うみお）わたるは昼食も取らずに、受話器に向かって朝からひとりで懸命にしゃべり続けている。

「大丈夫。おばあちゃんはもうひとりじゃないよ。俺がついてる。寂しくなったら俺を孫だと思って、いつでも電話してきてよ。たまにはこっちからも会いに行くからさ」

海尾わたるは小1時間の長話を終え、ようやく受話器を置いた。他の電話を確認したが、保留中だった電話はすべて切れてしまっていた。

隣では女上司が熱心に爪を研いでいる。それが1日の内で最も大

事な仕事だとでも言いたげだ。
「ちょっと乙女さん。保留中だった3つの電話はどうなったんですか？」
望月（もちづき）乙女（おとめ）はすべての電話を銀色のヤスリで指し示す。いちいち言葉で説明するのが面倒なようだ。
「ところで、いまの、だれ？」
「高橋トメさん。今年で78歳。台東区のアパートでひとり暮らし。身寄りなし。死ぬ方法を教えてくれって」
「死なないわね」
少し鼻で笑ったあと、乙女は即答した。
「なんでそんなことわかるんですか。おばあちゃんの声、いまにも首を吊りそうな感じでしたよ」
乙女は事務椅子をゆっくりと90度回し、わたると向き合った。乙女の鋭い視線がわたるを射抜く。
「聞こえなかったわ。いのちの声が」
吸い込まれそうなほど深く青みがかった碧（みどり）の虹彩。その瞳で見つめられると、わたるは何も言えなくなってしまう。まるで魔法でもかけられたみたいに。
「ねえ、この3日でもう3度目だからよく聞いて。自分に与えられた本当の仕事を忘れるないで」
そう言い終えると、乙女は自分のデスクに向き直り、日誌の新規欄に高橋トメの年齢、性別、住所、電話番号を記入した。そしてふたたび、熱心に爪を研ぎ始める。
わたるはひとつ大きなため息をつきながら、御用聞にやってきてからの3日間を思った。仕事といえば、ずっと電話を取り続けること。ここには自分と乙女の他にも、男女2名の職員が在籍している。でもこのふたりは、昨日わたるが相談にのった相手の家に出向いて行ったきり、朝から戻ってこない。
「乙女さん。これでもう3日ですよ。いったいいつになったら、その本当の仕事っていうやつがくるんですか」

乙女からは何の反応もない。わたるはまたひとつ大きなため息をつきながら、席を立った。
「どこにいくつもり」
乙女の鋭い視線がわたるに向けられる。
「別にサボるつもりはないですよ。僕だって出るものは出るんです。それに」
「しっ！」
ひんやりとした銀色のヤスリが、わたるの唇に当てられた。
「ちょ、ちょっと何ですか。突然。危ないじゃないですか」
「我慢なさい」
「はぁ？　ほんとに漏れそうなんですけど」
「いいから黙ってて」
乙女は強引にわたるの肩を抑えて座らせる。それからわたるの目の前にある電話を食い入るように見つめた。
「来るわよ」
「何がですか。出前でも取ったんですか」
「そんなとこよ」
3秒後――。
電話が鳴った。受話器を取りかけたわたるの手を、乙女は遮った。乙女は青みがかった碧の瞳でわたるを見つめながら、
「いのちの声が聞こえるわ」
と呟いた。それから、ゆっくりと受話器を持ち上げた。

「こちら、市民保護センター御用聞課です」
そう言ったきり、望月乙女は沈黙した。受話器の向こうから声は聞こえてこない。けれども乙女の耳にはすでに、相手の命掛けの声が聞こえているのだ。
わたるは、この3日間で初めて、乙女の真に迫る眼差しを見た。青みがかった碧の瞳には、まるで受話器の向こうの相手の様子が見えているみたいだ。透き通るような白い肌が、瞳の碧をより際立た

せている。高く筋の通った鼻、官能的な真っ赤な唇。よく見なくても相当な美人であることは、わたるにもよくわかっている。
乙女の赤い唇がようやく動いた。指先がメモを取る。
「ぼく、お名前は？　タカクワ、ユウタ、くんね。近くにお母さんはいる？　そう。出かけてるのね」
電話の相手はどうやら男の子のようだ。わたるは乙女の手元にあるメモを見て、そんな見当をつけた。
「お母さんと新しいお父さんとの旅行はいつまで？　そう。あさってなの。じゃあ、それまでは大丈夫なのね」
乙女はしゃべり終えると、次はユウタくんの言葉に耳を傾ける。わたるの耳には乙女が話す言葉しか伝わってこない。
「ユウタくん。明日かならずこちらから会いに行くわ。でも念のために、いまからお姉さんが言うことをよく聞いて。万が一、今日お母さんと新しいお父さんが家に戻ってきて、ふたりの様子が変だと思ったら、すぐに家を出なさい。タクシーに乗って、これからお姉さんが言う住所を運転手さんにしっかり伝えるのよ。お金の心配はしなくていいから。それと、１１０番は絶対にダメ。警察に駆け込んでもダメよ。じゃあ、お姉さんの言ったこと、繰り返してみて」
最後に、乙女は自宅の住所を告げたあと、その電話を切った。そしてすぐさま携帯を取り出すと、誰かに忙しなくメールを打ち始めた。

わたるの携帯が鳴った。
画面は〈クラウディ〉からの着信を知らせている。着メロは石原裕次郎の〈赤いハンカチ〉シブい設定だ。
隣では、望月乙女の携帯が同じメロディを奏でている。わたるは乙女の目を見た。
「服部さんからですね」
乙女は素早くわたるの口に銀のヤスリを当て、首をゆっくりと横に振る。ヤスリの先端が目の前で怪しく光る。

「はじめて？」
わたるは背筋に寒気を感じながら、目だけでうなずいた。
「ここでその名前を出してはダメ。そろそろ他のふたりが帰ってくる」
市民保護センター御用聞課内で、電話の主クラウディについて知っているのは、わたると乙女のふたりだけである。クラウディというのは単なる符号で、電話の主の本当の名前は、服部蔵人（はっとりくらんど）という。警視庁地域総務課に籍を置いている。しかし、これは表向きの顔である。本当の顔は別にある。さきほどの〈赤いハンカチ〉は、メンバーに緊急招集を告げるためのものである。
「わたしがさっきメールで知らせたの。クラウディはさっきの男の子を？なみだ？と認めたわ」
「じゃ、じゃあ」
乙女は碧色の瞳を輝かせながら、ゆっくりとうなずいた。
「四谷のクラブ〈巫女（みこ）〉は知ってるわよね」
「はい。そこでクラウディと初めて会いましたから」
乙女は腕時計を確認した。時刻はもう少しで午後6時を差そうとしていた。
「きょうは課長の机に日誌を置いて、定時に出るわ」
乙女がお色直しをする間、わたるはちょうど1週間前のできごとを思い出していた。クラブ巫女のカウンターで隣に座る服部から、自分のこれからのことについて説明を受けた。
わたるは日本全国を股にかける秘密組織〈風の会〉のメンバーである。さらにその組織の中には、〈陰踏（かげふみ）〉と呼ばれる少数精鋭の集団が存在している。わたるは今年の春、陰踏に抜擢されたばかりである。
「〈なみだ〉は放っておけねえ。我らの仕事はただひとつ。そのなみだを救うこと。〈泡溜（あわだま）〉は消さねばならない」
ブランデーグラスを揺らしながら、服部はそう言った。〈陰踏〉における〈なみだ〉とは、この世でその命を不条理な危険に晒され

ている人々のことを示す隠語である。それに対して〈泡溜〉とは、悪（灰汁）の塊を指す。つまり、なみだを泡溜から救うことが、陰踏の重要な仕事である。

――いよいよ本当の仕事か。弱きを助ける期待と、強きを挫く不安がない交ぜになって、わたるの胸中に広がった。

〈第1話・第1項／了〉

第1話・親にあらず・第2項（前書き）

陰踏（かげふみ）、クラブ巫女に集う。

第1話・親にあらず・第2項

東京JR四ッ谷駅からおよそ五分。雑居ビルの地下1階にクラブ巫女はある。

店のドアにはすでに〈本日貸切〉の貼り紙。海尾わたると望月乙女は、そのドアをそっと押した。

店にはろうそくの明かりだけが瞬いていた。カウンターやソファーにいくつかの人影が見える。

「これで全員だな」

わたるの耳に聞き覚えのある声が届いた。陰踏の総帥、服部蔵人の声だ。

「忙しいところ、みなよく集まってくれた。話の前に少し紹介しておこう。乙女の隣に立っているのが、海尾わたるだ。はるばる九州からきてもらった。齢は36。これからみなと一緒に働いてもらうことになる」

暗闇の中の人影が、それぞれのやり方でうなずいた。

「時間があまりない。乙女。みなに詳細を」

「それでは早速。なみだの名は高桑雄太(たかくわゆうた)。現在6歳の男児です。なみだにはかつて弟がいました。一昨年の夏、2歳のときに車の中で死にました。母親がパチンコ店で遊戯中の出来事で、なみだは彼の弟が息をしなくなるまで、同じ車にいました。その弟が息を引き取る直前、窓の外に母親の姿が見えました。そのとき、母親はうっすらと笑っていたそうです。今度は僕が、ママに殺されるかもしれない。そう話してくれました。なみだはいま、ひどく怯えています。なみだの話では、母親はいま、新しい父親と山中湖へ旅行中。戻るのは明後日の予定だそうです。明日、わたしと海尾とで直接会いに行く予定です」

服部蔵人は乙女の話を聞きながら、事実をひとつずつ確認するようにうなずいている。

「では、みなに聞きたい。面倒かもしれないが、１度わたるに名を言ってから話し始めてほしい」

「話の続きの前に、ちょっとだけいいかしら」

　カウンターの奥から、オペラ歌手がアリアを歌うときのような声が響いた。みんながそちらを見る。

「ねえ、蔵人。新人君のために雰囲気を作りたいのはわかるけど、これじゃああんまり暗すぎるわ。ひとつだけ灯りをつけてもいい？」

　クラブ巫女に明かりが灯った。全員が眩しそうに目を細める。暗闇の中では怪しく見えた人影も、光の下では街行く人々とそう変わりはない。

「こんばんは。あたし、望月（もちづき）八千代（やちよ）。もう三十年以上、このクラブのオーナーをしてるわ」

　わたるはカウンターの奥にいる八千代に向かい、ぺこりと頭を上げた。金髪。透き通るような白い肌。真っ赤なルージュ。紫のスーツが地味に見えるほど、メリハリの利いた面立ち。服部蔵人とはふた周り以上歳が離れて見える。

「じゃあ、俺から話そうか」

　蔵人の隣に座る小柄な男が口を開いた。登山ジャケットにジーンズ姿。ボサボサの髪に濃い眉毛、数日剃っていない無精ひげを蓄え、まるで黒澤映画の用心棒みたいな顔をしている。

「おっと、忘れてた。俺は風間（かざま）相太（そうた）。普段はフリーのジャーナリストをしてる。よろしくな。蔵人さんにはもう話したけど、みんなには乙女の話を少し補足する。事件については、２年半前に裁判が終わってる。事件の当日、なみだの母親の高桑エミリは、朝９時から知り合いの男とふたりで東京郊外のパチンコ店に入って、午後５時まで８時間も遊戯に興じた。当日の日中の気温は３８℃。裁判では、炎天下に幼子を放置した保護責任の意識の欠如とその過失の重大さが問われた。エミリは裁判で『こんなことになるとは思わなかった。たいへんいけないことをしてしまった』と証言しただけだ。４年の求刑に対して、下された裁きは実刑２年。そしてこの春に刑期を終

えて出てきた」

「アホみてえな女だな。そんなことになるなんて小学生でもわかるだろ！」

　ソファーにどっかりと腰を下ろしている男が、怒鳴るように言った。茹で上がった蟹のように、顔を真っ赤にして怒っている。座っていてもそれとわかるかなりの大男で、シャツを脱ぐのにひと苦労しそうなほど二の腕が太い。まるで赤鬼だ。

「いまのが、根来久紀（ねごろひさのり）さん。下町で旋盤工場の社長をしてる。私たちに必要な道具を作ってくれる人よ」

　わたるの隣で乙女がぼそぼそと呟く。

「ちょっと社長。話が終わるまで我慢してよ。俺だって頭にきてるんだからさ。いい、冷静に聞いててよ。出所後の高桑エミリは、すぐに男と一緒に暮らし始めている。当然なみだの高桑雄太も一緒だ。でもどうやらこの男、2年半前の事件当日、パチンコ店にエミリと一緒にいた男らしい。男の名前は水野竜也（みずのりゅうや）。渋谷でいまもうだつの上がらないホストをしてる」

「それって本当の話なのかい？」

　根来の向かいに座る優男が口を挟む。

「ああ、どうやらな」

「じゃあ何？　なみだは母親と一緒に弟を死なせた男とひとつ屋根の下に寝起きしてるってこと。しかもその男が新しい父親になるって、母親から告げられている。まったく僕にはアンビリーバブル過ぎる現象だ」

　男はそう言って両手を大きく左右に広げた。まるで俳優みたいだ。いちいちリアクションが大きい。ハリウッドのアクション映画のヒーローの隣くらいなら、出演していてもさほど違和感はないだろう。

「伊達黒輝（だてくろき）さん。六本木で心理カウンセラーをしてる。女性を口説かせたら日本で5本の指に入るでしょうよ」

　乙女は鼻で笑った。伊達が話を続ける。

「僕はその少年の心理状態が心配だな。乙女さんのところに自分ひ

とりで電話してきたんだろうから、よっぽど切羽詰った状態だろうね」
　伊達の隣には細い朱色のふちのメガネをかけた学生風の女がいる。スカートからはみ出た膝の上で、しきりと右手の人差し指を動かしている。
「あの女の子。何してるんですか」
　わたるは小声で乙女に聞いた。
「長島（ながしま）伊勢（いせ）さん。大事なことを膝にメモする癖がある。そして1度メモしたら、二度と忘れない。東部大学生物学部の学生で、まだ三年生なのに研究員をしてる。専門は自然毒物研究よ」
　カウンターに腰掛けた服部蔵人は、目を閉じたまま腕組みをし、熟慮を重ねているようだった。
「それで、どうするの？　蔵人」
　望月八千代が蔵人に言葉を促す。蔵人は何かを納得したようにひとつうなずくと、陰踏たちに向かって指示を出す。
「おそらく、今回の仕置（しおき）の場は山中湖になる。ブン屋はすぐに山中湖へ。乙女は明日、なみだの少年、泡溜（あわだま）が戻り次第、水野竜也。心理は同じくエミリ。社長と学生は待機。次の集合は1週間後にしておくが、今回の仕置は予断を許さない。急な連絡にも即座に対応できるようにしておいてくれ」
　一堂がうなずく。
「わたしは水野のことをもう少し調べておくわ。この世界はわりと狭いから」
　そう言ってから、八千代はジタンに火をつけ、紫の煙をゆっくりと吐き出す。
「よろしく頼む。それから、みなには念のために言っておくが、我らが探るべきは表に見えている事象ではない。泡溜の心根だ。やつらの心根を探れ」
　ふたたびクラブ巫女の灯りが消された。陰踏の一団はそれぞれ街明かりの中へ姿を消していく。どこへ行くべきかわからず、わたる

は乙女の背中を追った。後をついていく間、乙女に聞きたいことが山ほどあった。とくに自分が名を呼ばれなかったことについて、乙女がどのように考えているのか。それが知りたかった。

（第1話・第2項／了）

※第3項、すぐにアップします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4206u/

仕置の徒（しおきのと）

2011年10月9日08時10分発行